



学校だより

小和田小学校

令和8年度10月号

【学校経営方針】

一人ひとりを大切に、社会力を育み、みんなの笑顔がある学校

【学校教育目標（めざす子ども像）】

「心も体も丈夫な子」「思いやりのある子」「自ら学ぶ子」

【学校経営目標（めざす学校像）】

「学ぶ喜びを感じる学校」「保護者、地域から信頼される学校」

「教職員が成長し合える学校」「心落ち着くきれいな学校」

日光の歴史と自然に触れた修学旅行

校長 山崎 悟史

9月10日（木）・11日（金）の2日間、6年生は栃木県日光市に修学旅行に行ってきました。この日に向けて、夏休み前から様々な準備を重ねてきました。学年で心をひとつにして修学旅行へと臨めるよう、学年集会を開きました。また各学級では、活動班、宿泊班、電車・バスの座席決めや、2日間の詳細な日程確認を行い、社会の歴史学習と関連付けながら、事前学習も進めてきました。特に夏休み明けからの日々は、修学旅行が待ち遠しい・・・と感じていることが子どもたちの姿から伝わってきました。

2日間ともあいにくの雨模様ではありましたが、大きな影響がなく、予定通りに見学することができました。

1日目は日光の豊かな自然に触れてきました。華嚴の滝は水量が少なかったものの、霧に遮られることなくはっきりと見ることができました。湯元では、各自10円玉を源泉につけて変色するかどうかを試していました。「10円玉の色が少し変わったよ」と嬉しそうに見せ合う姿が見られました。

2日目は、日光の歴史・建築美に触れる一日となりました。日光東照宮ではガイドさんから、陽明門・「三猿」などについて詳しく説明していただき、その後のグループ行動では、家康公の墓（宝塔）、鳴き竜などを見学しました。

帰りの電車では、「もう着いちゃうの」「まだ帰りたくない」・・・と話している子が何人もいました。修学旅行が終わってしまうのが名残惜しい・・・そんな気持ちが伝わってきました。子どもたちにとって本当に楽しく、充実した時間となったことを大変嬉しく思います。

今回の修学旅行を通して、公共のルールやマナーを守ること、自分で考え、仲間と協力して行動することの大切さをしっかり学んでくれたと感じております。どの場面でも立派な姿を見せてくれました。

子どもたちが安全に、安心した気持ちで過ごせるよう、事前の準備期間も含め、学年の先生方の心くばりがさまざまな場面で見られました。2日間、子どもたち一人ひとりの様子を見守りながら、学年・付き添いの先生方できめ細やかな連携をし続けている姿は、子どもたちに大きな安心感を与えていました。

6年生の保護者のみなさまにおかれましては、説明会への参加、事前の準備、そしてお子様が安心して参加できるようご家庭で温かいフォローや励ましをいただき感謝の気持ちでいっぱいです。小学校生活の一大行事である修学旅行は終わりましたが、後期も子どもたちがよりよい学校生活が過ごせるよう、引き続き、ご理解、ご協力いただければ幸いです。

今後、各学年の校外学習が続きます。6年生同様、1～5年生の子どもたちも校外学習だからこそできる体験や学びを重ねながら、楽しく充実した時間を過ごしてほしいと願っております。

たてわり活動で学年を超えたつながりを

9月24日(木)の第1回たてわり活動を行いました。たてわり活動は、「異学年との交流を通して、自分を多面的に見ることや、人との関わりについて学ぶ」ことを目的としています。1～6年生が関わり合いながらともに楽しいひとときを過ごしてほしいと思っていました。

当日の朝、あいさつをしながら登校の様子を見守っていると、「今日はたてわり活動だね!」という会話をしている子が何人もいましたので、かなりの子どもたちが関心をもち、楽しみにしてくれているように感じました。

事前に各クラス6グループに分かれていましたので、すべての教室で1～6年生の子どもたちが集まることになっていました。1時間目が終わり最初の放送が入ると、6年生は1年生が自分の行く教室へと移動できるよう、誘導してくれました。1年生が各教室に移動できたタイミングで、他の学年の子どもたちも次々と教室へと移動して各教室で1～6年生が全員集合です。

たてわり活動の開始とともに、各教室にいる6年生がリーダーとなり、6年生が企画した内容で活動が進んでいきました。1～5年生が楽しめるように…という思いをもって活動内容を考えてくれていました。自己紹介やみんなで楽しめるゲームを通して、徐々に打ち解け、楽しそうな笑顔もたくさん見られました。優しく声をかけてくれる6年生と1～5年生が関わり合う姿が微笑ましく、心温まるひとときとなりました。

学年を超えたつながりを、今後の学校生活や休み時間の交流などにも活かしていければと思います。

夏季休業期間中に学んだこと

7月22日(水)に教育センター主催「第16回響きあい教育シンポジウム」に参加してまいりました。「子どもの「自ら育つ力」を育む環境とは～乳幼児期から思春期・青年期の子育ち・子育て～」というテーマで、二人の講師によるご講演、講師二人と教育長の鼎談(てい談:3人で向かい合って話し合うこと)という内容でした。

乳幼児期、思春期・青年期に関する二つのご講演から、演題と特に印象深かったお話の一部を紹介します。

◎「乳幼児期における子どもの自律性の発達—アタッチメントが育む「一人でいられる力」—

「アタッチメント(愛着)」の重要性とともに、大人は子どもにとっての「安全な避難所」「安心の基地」という大きな役割を担っていることを再確認しました。「アタッチメント」は単なるスキンシップとは異なり、子どもが不安なときになどに身近な大人が寄り添い、安心感をもたらす経験を繰り返すことで、「安心」という土台を築くと言われています。またアタッチメントは、一人の感情の崩れを二人(子どもと大人)の関係によって立て直すと言われており、「何かあったらあの人のところに行けばいい」「何かあったら絶対に守ってもらえる」という「見通し」をもてるようになります。この安心感があるからこそ、子どもは勇気をもって外の世界(探索・挑戦)へと踏み出すことができるそうです。

◎「思春期・青年期の心育ち～“自律から自立”を支える環境～」

思春期・青年期に関するご講演でも「アタッチメント」の話を伺うことができました。大変興味深かったのが、思春期・青年期になると「アタッチメント」も変化していくことです。アタッチメントの質的变化として「接近」「身体的接触」「保護」から「話す」「受容」「理解」になっていき、アタッチメントの対象は「親のみ」から「教師」「先輩」「友人」…と家族外の人間関係に少しずつ拡大していくとのことでした。

二つのご講演から、アタッチメントは生涯にわたって安心感の回復・維持に欠かせない役割を果たすことがわかりました。

ご家庭では保護者のみなさまがその役割を担ってくださっていますが、学校では私たち教職員が、子どもにとっての「安全な避難所」「安心の基地」でありたいです。これからも保護者のみなさまと手を携え、子どもたち一人ひとりの心に寄り添いながら育ちを支えてまいります。